

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 69: 54-79
Issue date	1898-12-24
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5206
Right	

初冬の藁圍する茶店かな
 雪隠の屋根は危き瓢かな
 座蒲團に火を落さたるいらかな
 ことく霞はねかへる雨戸かな
 岩窟の中に大なる氷柱かな
 山深み鹿笛拾ふ草の上
 朝顔の露を硯に集め得つ
 初冬や野葡萄熟す藪の中
 灯のうつる水車の軒の氷柱かな
 鹿笛や却て鹿をにがしたる
 亡き人を忍ぶが岡や秋の雨
 庵の鐘宮の太鼓や虫送り
 七月六日硯を洗ふと記えけり

藝 報

○天 長 節

嬉しきかな、身生れて、血は大和民族二千五百年
 來の精粹をひき、さらに、我にこの清潔の血をつ
 たへたる祖先が、未だ嘗て逢はざりま盛生にい

全 藤 全 芝 全 寅 蓼 全 紫 全 千 全 全
 葉 峯 彦 舟 川 江 江 江

で、なほさらに未曾有の 聖君に率ゐらる、吾人
 は年とる毎に、この節の難有くなるなり、謹で祝
 す、

○第八回開校紀念式

人は敬虔にして非運を親まず、天もさらに變妖
 を加へず、去る十月十日、長願永思、第八回の紀

念式す、

都々桂蘭在彼芳叢、夙夜豈不進思盡忠と、凜々しくかける大幅は、美しき床づくりの式場にかかけられ、左右には甲冑及和漢の書を飾りて、文武を標章し、さらに穀草木葉にてつくれる記念の大幅がけたる前に、國旗を交叉えてはなわづくりの房さげ、下には大なる花瓶卓にのせて、秋の花のいろ／＼をもれり、萬事質素を旨とせられたれば、式場の入口の縁門も、只門松おしたてたり、例年の如く華美ならざれど、清雅にしてよく式場の肅めやかなるにあひき、午前九時五分、空中一發の音させて、一朵の紫雲現はれしとき、一同式場にくりこむ、中川校長まづ勅語を捧讀せられ、次に校長の祝詞あり、職員總代杉山教授、大學豫科三年總代手塚光貴君、二年總代山形元治君、一年總代田仲忠良君、工學部總代中嶋種吉君、各祝詞を朗讀せ、續いて大學生の祝電、生徒數名の祝詩祝歌の披露あり、終りに生徒一同、阿蘇の峯よりいやはかさを唱へ式やむ、來賓には、徳久知事、足立參謀、其他紳商、代議士、諸學校長等四十餘名なり、例によれば、式おはれば、生徒の擊劍に

移る可きところなれども、運動會に、炮烙割の催しあるにより、直ちに晝餐を配附せ、來賓一同は瑞邦館に招じて餐す、

斯くて、午砲已に鳴れば、みな運動場に入る、式場の華美ならざりしは却て清肅を助けたれども、運動場の裝飾なかりきは陽氣うせたり、常は美々しかりき入口の門は影さへなく、賞品授與所も、僅かに西方一帶の棧敷の奥に少しく秀でて、紅白の條入りたる幔幕をばりたるのみ、國用多端の折なればとかにて、かくは質素にせしよしなれども、餘り物淋しければとて、式場の額を旭旗とそへて賞品授與所の上に移す、全体の光景少しく引立つ、此日恰も日曜に當せざりきを以て、式場以來の來賓が、運動目録を携へて來賓席にある外は、未だ一人の來觀者なし、また全く萌はぬ生徒のたまりに向て、旗拾競走第一回と云ふたぬけに呼びまげし聲の、いとわかまかりきも、運動はまづ、このたぬけの聲によりてれそり始めぬ、

《旗拾競走》赤旗、白旗、一色どしに二列の立列らふを、往反幾回一本づゝ抜きかへることなれ

ば、氣あせり、息喘れ易く、且つや、逸れる足のと
どめ難くて、旗にきかみてとまるあり、握るや否
や、ひつかへまざまに板ぎかへちんとして、さな
急ぎ玉ひぞと、いはぬ計に板ぎ來ぬ旗にとやめ
られ、ひきなりむきに板ぎさるときは、はや人に
遅れたるあり、此技ささより始めに板ぎかへる
あり、手まへより始めに板ぎ來るあり、紅白の旗
を持して、かけゆき、かけもどり、駱驛、交錯、最
後の一本に至りて、初めて勝負の數見え來るま
で、眼に映じ初め來りて、殊に見榮多し、

《戴囊》小豆袋、頭に戴せ、手放しに走る、落ちざ
らんこと妙なり、用意の令下りて、合圖の鐵砲響
くとき、人とせり合ふて、まだ一步もふまぬには
や落すあり、二三間行きてすぐ落すあり、半程ま
で行き、鬢にさゝえ、鼻にさゝえ、遂にねとすあ
り、腮ひきこみ、胸さしたし、頭の真中にのせつ
つ得意に走るとき、如何なる機みにや突然落ち
るあり、みるにいとわかし、髪の毛五分蒔につみ
て、袋の織目にくわせん野心も、帽かひらせだれ
ば仇なりける、

《二人三脚》此時、來賓の家族席稍々充ち、埒のま

わりも少しく人むる、二人の足を二つにくみり
たれば、身の長短肥瘠よく似合ひたるものと、二
三日前より二人の足なみ馴らしおかねば駄目な
り、去れば色白き細腰に、圖太き髻足縛り合はま
愛嬌はなかりまも、よく釣合ひたる男の、相抱き
て凜々しく構へたりしは爽やかなりき、心あせ
りの調子合はずして、もつれこけしものゝ相見
て笑へるも樂しげなり、

《二百二十ヤード》一氣奔放、韋駄天走りに走
るが、かちの事なれば、觀るものは恰も、辻風の砂を
捲いて疾過するを望むに似たり

《高飛、竿飛》高飛は準備まづしかりければ、記す
べき程に出來ざりしこそ遺憾なれ、されど竿飛
は例によりて見榮よく出來たり、運動の中最も
人の目をひくは此技なり、美しく照れる秋の日
にすらりとしたる體軀の、高く翻へりて、さわれ
ば落る細索を、見事にこえて、たゞしく地に落つ
るときは、誰れも覺えず手拍ち鳴らす、今年は、
相長君病後なれば如何あらんと思ひしに、左も
なくて笠原君よく勉めたれども及ばず、遂に九
尺の高さを九尺四五寸の優勢にて、見ん事とし

たるは目覺ましかりき、

《障害物》張り繩をこえ、梯子をくぐり、網をぬけ、樽をくぐり、更らに蘭薊うらがへしにぬひたる袋をぬくれば決勝線なり、蘭薊むしろ裏返しにたれば、人のくぐるとき恰も猪のむくづくに似たり、袋悉く塞がりたるときに來合せて暫し躊躇らひしもありしは氣の毒にて、袋の中にひさかゝりて狼狽へながら出て見れば、人は已に一着二着の白旗とりて賞與品所にゆく折なるに、呆然たるものありしは可笑まかりける、

《盲目競走》これは、今年新奇の愛嬌運動、目を縛ばりて更らにさまゝの假面被ひらせ、遠く一列に並べる柿の實を拾ひ來るなり、巡查あり、稚子あり、よこ口あり、瘤出來あり、於多福あり、れちよば口あり、鬼婆々あり、仁木彈正あり、已に被ひり畢はりたるを見るさへ可笑しきに、用意の一聲に構へ出したるさま、可笑しきこといふばかりなし、合圖の一聲ドンと響きて、眞尋にかけだしたれど、柿のありかを行きこねて、あらぬところにくろつくあり、また行きつかぬをば、はや匍ひすわりて探ぐりまわるあり、丁度の

とどろにゆきあたりて、二つ手にふれたるに、生きたるものでもさぐるが如く、ハツと驚きさぐり直してありかを逸し、軀をこらばせて脊中にまきあて、ぐすと起ち上がりて驅けもどるあり、柿はたま／＼取りたれど、得知れぬ方角に驅けもどるあり、此時見物人は已に埒の周圍に描めき居たれば、笑ひをよめく聲天地に響きて興初めて酣なり、忽ち見る、感づよき盲目は、已に審判諸先生に助けられて、賞品所に向ふとき、埒の一方には、角荒らく口裂けたる一ケの白鬼、足もと危げれば手おのづからあがりて、さながら柿やいづことくるひまわるが如きあり、見るもおかじさおちよば口、首ちよこ／＼と打ふりて、まだうろ／＼と見まわるあり、あまり可笑しさに腹のよるゝと一二す、おもはず柿田先生は何處ど腹をかゝへて苦まがるもの少からざりき、

《二人單脚》負くると見て齒痒ゆきは此技なり、疳癪腹にわきて足自ら走らんとすれば、天罰たちどころに至りて地に跪かざるを得ず、狼狽へまくりて起き上がれば、亂れし調子のまた整ひがたくて、また忽ち匍匐はふ、殊に今年は手を前

に結ばへたれば、飛ぶ毎に組みたる手をちよきちよき上ぐる様、恰も支那の傀儡が禮拜するとも見え、倒れたるときは支那人の地に跪きたるに似たり、倒れえ人の齒痒さ加減例年に比して一入と推せらる、

《小學生徒》三十、四十、一處に群れて尻たかくに引きまくり、押し合ひへしあひ走りだす、年で殊に秀でし生徒の、間に難じり居るこぞ、残りの生徒憐れと見るまに、存外にも、小さき生徒の捷やきあり、如何に遅れても、無邪氣に走り通はすやら、朋輩の賞品羨まえげに評し合ひつゝゆくなど、いと愛らえ、獨り年葉の合はぬ大き生徒の驅け抜けて後顧みつゝゆける面憎え、

次は母衣曳競走なれども、この間に幼年學校生徒の五百二十八ヤード競走を行ふ、四十余人づつ二列にならばせ驅けいだす、靴ふみ居たれば、草原のこどももあるえ、おはりにはいと疲れて見えたり、

《母衣曳》一流、二流、風になびさせ走せ競ふ、偉觀極わまりなえ、

《スプリンレース》凹れる飯もじに、雞卵の殻の

みなるを入れて走ることなれば、雞卵の殻のころび落ちやすく、最後に出掛けし人三着を得たり、

《提灯競走》今年は、中にて一度梯子をくぐらざる可らざりし、提灯よりさきにいだして、そつと駆けいづる様、さながら洞穴の缺をぬけ上るに似て、己が尻より先づ入れて、後より提灯引きいだすは、ぬけ下るともみゆ、提灯は柄より外に握ることを許さざりえゆへ、我軀のくゝるあいだ、提灯の尻地につけじと勉むるさま難儀なり、行ふこと三回、このあいだ幼年學校生徒の綱引を催し、二百二十の最後競争に移る、石川清人君の獨走りにて張合なかりき、

《來賓競走》本年の來賓競走者は、今迄の紀念會中最も健脚に見えたり、和田喜傳氏一等を得られ、常は多く一等を得られえ、山崎先生、僅かに三等を得たり、

《中學 師範、商業》商業學校などは、殊に英氣を養ひ居りえとえが、同校深井三郎氏二着を得、一着は濟々鬘正木清九郎氏に得らる、

《擬馬》白銀の轡ふくみて、金覆輪の鞍こそれか

ね、快脚肥逞の駿馬ども、來賓家族の席より、美々しき稚子ども跨らせ來りて心や嬉しむ、ヒーンと一聲長嘶く心を、ヒュッと計りに喉聲をばりてうち勇む、各我勝たずんば止まずと計り驅けいだせしが、馬も騎手も一際すくれて、東の端に驅けもどる奴こそ勝てと思ふ甲斐なく、負けたりけるは力なかりし。

《職員職員諸公亦老ひ給へるかな、提灯競走にあらざれば、せぬと宣ふ方々多し、依りて足らぬ提灯漸くにとりまどめて行ふ、僥倖も何も果なくはづれで、緒方先生なほ第一着たりしはれかしかりしか、

《旗拾最後》和田九市君、心安くも勝つ、

《障害物最後》勝は鶴見宜清君に歸せり、

《炮烙割》障害物最後已に畢はると見るまに、擊劍道場のあなたより、面小手胴に身を固め、右手の小手と面の項に、各一ヶの炮烙をつけたる雄々しさ一群、運動場にくりこみ來るや、別れて二軍となり、再び合えて斬り挑む、命を知らぬ荒武者ども、縦横無盡に荒れまわれれば、微塵になりて飛びちる炮烙、さながら血まはど怪まれ、瞬くひ

まに残る首もなぞと見て、遠しくも合圖の退鐘うちならす、北軍勝ちたれど首のこるもの僅かに三つなりける、

《八百八十ヤード》河村君、已に勝つ可きと見えしが、鶴野忠一君勢絞りて突進え、決勝線の眞際に飛び越す如くに勝たれける、

《各級撰手》紅のふさ肩よりかけめかえたる一部二年福原清吉君、見事に勝を制え、まばし胴上げの賑ふを見る、技全くおはれば、來觀の老幼また影をどけめず、まばしの繩引に五體をまめなはし、夕なぎしめる芝生の上に、監督諸先生と各組の茶話會をわへしときは、最後の烟花已に淡光を帯ぶると見えより、なほ、夕やけのあかり全く衰へしころなりき、

運動種目 一等 二等 三等 四等 五等

《旗拾競走》

第一回 福原

第二回 和田

最後 和田

《戴笠競走》

第一回 佐伯

第二回 鶴見

《二人三脚》

（阿部）山田

（平田）山口

（土屋）鶴見

（有吉）太田貢

（桑畑）梶谷

（齊藤）

(二百二十ヤード)

第一回 常吉

第二回 福原

第三回 太田一平

最後 石川

(高飛) 相良

(竿飛) 相良(九尺)笠原

(障害物競走)

第一回 鶴見宜

第二回 伊集院

最後 鶴見

(盲目玉拾)

第一回 金崎

第二回 財部

(一人單脚)

(スプリンクス)

第一回 大塚

第二回 西村

(提灯競走)

第一回 村上

第二回 片山

第三回 大塚

(幼年學校生徒競走)

(來賓競走)

(中學、師範、商業)

(中學、師範、商業)

(中學、師範、商業)

(中學、師範、商業)

(中學、師範、商業)

(中學、師範、商業)

(中學、師範、商業)

(中學、師範、商業)

安東

石川

上村

東卓

大住

鈴木

前田

津曲

伊森

石井

阿部

北島

上村

江口

吉田

河野

北島

丸山

橋本

關

高嶺

鶴見宜

濱崎

久留

柴山

北野

鎌田

山崎

永野

三澤

富田

犬平

鈴木

村上

上村

東卓

大住

鈴木

前田

津曲

伊森

石井

阿部

北島

上村

江口

吉田

河野

北島

丸山

橋本

關

高嶺

鶴見宜

濱崎

久留

柴山

北野

鎌田

山崎

永野

三澤

富田

犬平

鈴木

村上

津田

大住

鈴木

前田

津曲

伊森

石井

阿部

北島

上村

江口

吉田

河野

北島

丸山

橋本

關

高嶺

鶴見宜

濱崎

久留

柴山

北野

鎌田

山崎

永野

三澤

富田

犬平

鈴木

村上

村上

鈴木

前田

津田

大住

鈴木

前田

津曲

伊森

石井

阿部

北島

上村

江口

吉田

河野

北島

丸山

橋本

關

高嶺

鶴見宜

濱崎

久留

柴山

北野

鎌田

山崎

永野

三澤

富田

犬平

鈴木

村上

村上

○演舌會概況

(八百八十ヤード)鵜野 河村 田尻 岩下 山村 西

(握手競走)(福原(一部二年))

昔は、孤身單劍、山河を蹈んで虎狼を搏ち、匕首を挾で蕭々の歌を歌ふ、今は三寸の舌能く衆聽を集め、自己の所思を以て萬衆の心腹に推す、兩者異なりと雖も其利器たるに至ては則一なり、

頃ハ十月廿一日、演舌會を瑞邦館に開く、撃柝時期を報ずるや、來會者館に充つ、蓋し本學年第一

回の演舌會にして、新入生の來會多きを以てなり、演舌部委員清家君、先づ起て開會の辭を陳

ぶ、次で第一席川本君沈靜の姿を以て、徐に説き起えて曰く、社會に於ける思想の二大潮流とは

如何なるものなるや、進歩の思想あれば此に保守の思想あり、其欲する所共に社會の福利安寧

を圖るに外ならず、只其方便の異なる所、揚我抑彼の思念は不知々々此間に侵入し來り、互に相

排擠せんとする結果、成果陋醜、社會の安寧を害亂之、福利を害し、爲めに汚瀆を流すに至る、此

の如きは眞に其欲する所にあらず、然れども權衡其宜しきを得ざれば、勢の趨く所、六馬奔逸制

衡其宜しきを得ざれば、勢の趨く所、六馬奔逸制

衡其宜しきを得ざれば、勢の趨く所、六馬奔逸制

衡其宜しきを得ざれば、勢の趨く所、六馬奔逸制

御其當を得ず、爲めに意外の結果を生ずるに至る、要は只勢力均衡を保つにありと、辭激して氣先づ走る、蓋し其深く感ずる所あり之によるか、辯舌澁滞なかりしも少々低音に失ふ、聴衆の感を惹くこと一層ならしむる能はざりしにあらざるか、これ實に遺憾とせし所なり、川本君壇を下り、船田君是に代はる、快辯滔滔説き來り説き去り、駟馬に鞭て大道を走るが如き、砂磔なく、高低なき、爲めに抑揚を欠きしは短所なりし、題は今更ら云はずもがな、第三席は櫻井教授にして端艇部擴張會の意見を陳べらる、由來本會端艇部の設けあるも未だ完備の域に達せず、以て千百の健腕を試み、健兒の望を充すに足らず、第二期擴張のある所以元より其所なり、次で、吉田君擴張豫算に就て陳ぶる所ありたり、第五席校光教授の置土産は、乾燥無味との前提なりしも、國際公法上の云云と云へりしに至りては、左程乾燥にてもあらずしが如し、時に特意の諧謔を交へられえは興味一層なりと、最後に學校長より有益なる話ありたり、中に就き云へることあり、曰く、種々の器械が微妙なれば微妙なる

程、僅かの損處あれば遂に其用を辨せず、例せば行燈は變じて洋燈となり、洋燈は轉じて電氣燈となり、後者は前者より、其便宜の點に於て實に數等を超ゆ、然れども、針小の發火機は又能く直ちに暗黒界たらえむる便宜を與ふと、此語の伏する所堂簾燈火のみならんや、數番の演舌下れば、餘興と云て薩摩琵琶の見はれたり、絃聲斷續、妙音館内に充てり、夜更の靜寂は、却て琵琶の妙音を増したり、琵琶の聲止み、煎餅は見はれぬ、聞き盡え、食ひ盡え、散會せよは夜十時、

○擊劍紅白勝負 (KK生記事)
秋高ふして馬肥へたるの時、氣振ひ腕鳴る、龍南の健兒、何ぞ蠢爾として塾居せんや、時は來り期は熟え、我擊劍部は、廿有六日を卜し、例の紅白勝負を催す、亦快なるかな、午下一點鐘、武夫が原は、忽ち人の山を成え、天地何となく活氣を帶ぶ、既にして道場の東西に、分れたる紅白の武士は、さながら元祿の當時を追想せえり、部長姑め教員員の臨席あり、外來劍客の參觀あり、漸場整然、犯す可からざる威風を呈せり、委員閉會の辭を終るや、勝負ははや始まりぬ、

刀先より、人の面を見るを、好格合とすと、氏の手腕中々鋭く、先江口氏もさるもの、二度の戦の疲れにも關はらず、心は前に劣らざりけり、されど松島氏の氣轉、漏るゝ所やある、例の弱點を發見し、遠慮會釋は、時にこそよれ、見事立派に胴を拂ひ、遂に勝を制えたり、江口氏は、一勝一敗にて、味方に土産としては、有り云へば有り、無しと云へばなぞ、差引勘定原位に復したり、俗に云ふ、元を得るは、商の上乗なりと、何ぞ商のみに限らんや、

松島氏は、舊陣を整へつゝ、敵を待つ、紅軍より現はれたるは、淺井氏なり、陣は既に成り、鼓の掛聲は、既に響き、戦は始まりぬ、淺井氏の太刀、舉り過ぎること屢なり、これ面をとるには、或は便ならん、忽ち松嶋の眉間は、二つとなれり、されど一利一害は、數の免れさる所、松島氏は、看破する所あり、足は轉じ、刀は飛びて、淺井氏の胴を撃つ、蓋々特意によりてこそ、勝利も得るなれ、遂に淺井氏は、例の兵法もて、松嶋氏の面を得たり、氏は恨を呑んで退陣す、是非もなき事なりき、

白軍よりの新手は、眞田氏なり、敵や遅しと、待ち構へたる淺井氏は、刃の塵を拂ひつゝ、立ち向ふや否や、敵の虛に付け入りつゝ、眞先に小手を占めたり、眞田氏中々隠せりとも見えず、益々勇を振ひつ、先の返しと云はん計に、よき小手をうちたり、貧乏神にあらねど、一方弱れば、隨て一方は、勇むものなり、二撃三撃の後、淺井氏は面をどられて退きたり、

紅軍の友枝氏、我に奇策あり、味方の仇思ひ知れど、云はん計の態度にて、眞田氏に出て向ふ、互に秘術を盡しつゝ、丁々發矢と切結び、二合三合戦ひまに、お召乗の膝栗毛は、頓に逸し、友枝氏は、蕩と倒れたり、眞田氏は是を見て、唯茫然たり、敵を厄に苦めずとの謂なるか、是れ宋襄の仁なり、夫れ戦は變に應じ、機に投するにあり、利にして是を用ひんは、險阻も可なり、志氣振は、巉巖に、鼓たんも可なり、其の要唯掛引にあるのみ、倒れても受け損せしと、斜に太刀をかざしたる友枝氏は、敵の寛大に驚きつゝ、緩々馬を乗り代へ、一顧加へて向へり、忽に去て胴をうち、忽にして衝を加へ、遂に勝は、友枝氏に歸す、仁

に報ゆるに、暴を以てするが如しといへども、これ戦略の然らしむる所なれば、如何ともする能はざるなり

白軍より出てたるは、其の名も荒き荒木氏なり、友枝氏元來沈着の如し、今此に求炭相客れざる觀あり、荒木氏は飽くまで漂悍なり、友枝氏の遠略其の功を奏せず、袋竹刀獨特の、小手と面とに、制せられ、沈勇こそ哀れなれ、兩氏の太刀先、後世恐るべきものあらん、怠る勿れ氏よ、

勝につのりたる荒木氏、壘を高うゑて待ち受けたり、紅軍よりあらわれたる若武者も、勝り兼ねざる豪の者、田尻氏とは知られたり、今日天晴の武者振は、更にも云はんずなん、氣を空にゑたる互の目禮、既に終ると見れば、高言百出、兩雄相誇ること頻りなり、撃も奇、撃たるも奇、一舉一動、活潑潑地、一時龍南の天地は、喝采の響を以て満されたり、流石に荒木氏や疲れけん、一つある面を二つ取られて、うち負けたり、何れも業鮮なし、勝負は面のみにもあらず、小手もあり胴もあり、強て擧ぐれば突もあり、種々變化ありて

こそ、勝負はよけれ、田尻氏揚々として、高く控えて構へたり、白軍の士高原氏出づ、間合善々と見へたるが、打や早き受るや遅き、高原氏は小手を損せり、電光石火と切結ふうちに、田尻氏は眞甲見事に頂戴せり、此敵あなどる可からずと思ひけん、近頃珍しき妙手は工夫せられ、高原氏の胴を打ちたる、田尻氏の手際は、これに限る、田尻氏は勇氣他日に百倍し、喝采の裡に得々たり、白軍の妹尾氏出向ふ、大小衝を失するも、素より何れも一人なり、あなどる可からざるは當然のこと、勝の響を擔ふたる田尻氏、丈夫りたる妹尾氏、一見勝負は決せらるゝ如きも、世に往々事實は皮相に相違するもの多し、何ぞ知らん、一利一害は常に伴ふものなるを、田尻氏は、面を撃つに利なるが故か、面を得たり、妹尾氏は胴をどる事、一度ならず二度までとりて、其の利害を確めたり、勝負は大小によるものならず、是只術によるのみ、田尻氏以て如何となく、

紅軍の手塚氏、今日は入静事にて、竹刀も重げに見ゆるは、弱れるにはあらざるなり、重き責任

と、強き謙遜との、然らしむる處なるべし、妹尾氏と立向ふ様、長短度を異にし、緩急相容れず、其結果却て奇觀を呈し、平塚氏の胴となり、妹尾氏の面となり、遂に勝は妹尾氏に歸す、謙遜緩漫も、時に依るものなり、

紅軍の勇士、今井氏代り出づ、凜乎たるあり、温乎たるあり、威ありて猛からず、進退舉措度を失せざるは、素養の致す處なるべし、妹尾氏息をひそめて、待つこと久え、打たんと欲して未だ撃たず、つかんと欲えて未だ衝かず、隙を窺ひ機を見るが如きもの、暫しなり、今や双方の氣合は熟え、何れや早き、何れや遅き、丁々發矢と切組んだり、今井氏の太刀、一層高く飛んだるとき、はや妹尾氏の面は、遠く響きて聲鏘々、巧なるか便なるか、妹尾氏は胴をうたんとすること、四たび三たびになりぬ、一々得たりと受止めたる、流石今井氏なり、されどその名残にや、氏の小手一本は損じたり、損するも勇むは人の心なり、さらばと計り打返す、太刀は妹尾氏の小手に飛び、易左たる刀風いと涼し、勝負已に決し、妹尾氏はや退く、

竹刀三尺清風に拭ひつゝ、高く控へたる今井氏は、千里雲晴れて、月五更のそれならで、白軍の強敵なる、田中氏はあらはれたり、戰は始りぬ、竹刀の響は酣なり、忽ち見る、今井氏の進むは、利なるが爲めにあらず、田中氏の退けはなり、氏の退くは、利なるが爲めにして、受刀を利用せんとなり、今や田中氏、漸く一步進んだりと見へたるとき、はや今井氏の面はうたれたり、其後刀を接する事數番にして、今井氏一つの面をとり、又一つの胴をとられて、勝利は田中氏に歸せり、氏のむげに退くは、いと見苦えくなん、今日は限り、氣焰衰へたる今井氏は、病氣なればなりと、いふ人もありし

紅軍の若武者、相良氏出づ、味方の仇一ひまぎと、云はん計りの有様は、竹刀の柄の手の中と、肩の動ける所にて知られたり、田中氏撃ち退きつ、相良氏進みつ争ひつ、戰數合に亘りしが、胴の隙く所せんかたなく、見てよりたる相良氏の、容赦は常の事になん、再び胴を打取りたり、手を空えくえて退きたる、田中氏こそ憐れなれ、白軍の士、鐵壁とゆかりある、金城氏は元として

顯はれ出づ、相良氏得たりと、待ち受けたるか、硬く鋭く鈍く強くありき鐵壁も、病後の事とて、今日は弱く鈍く柔く脆くなりて、一度のみか、二度まで胴を取られたり、相良氏得意の秘術にて、勝を占めたるも、故あるかな

岡上氏白軍より出づ、相良氏例の術をもて、忽ち胴を占めたり、太刀先別けて、鋭きにあらねど、無駄撃なればにや、岡上氏の秘術も、効を奏せず又もや面を取られて退きたり

白兵川村氏躍り出づ、姿勢と云ひ、刀跡と云ひ、相良氏と好一對、揃ひも揃ひ、組も組みなり、何れも緩やかなるたちにて、氣合能く適合せり、はや川村氏の太刀、左のかた斜に上りたるとき、此撃空しからず、相良氏の小手、見事に打落きたり、眞甲十分に振りがききて、打込む面、何れ劣らず、受け流すこと、數度なりしが、其終りに相良氏の受けたる太刀、能く利用せられ、川村氏の面を、またうにかにうちたり、やがて小手一本のあしらひにて、勝は相良氏に歸す、兩氏とも今一鞭を、心の駒に加へなば、御身達も勇みなん、見る人も心ゆかまきものを、緩に過ぐるは、ごと口惜

しきことなり、

白軍の士、明の辻氏あらはれたり、長竹刀としては、稍短きものを持てり、相良氏面一本は打ちたれども、面は胴との返報にて、勝は辻氏に歸す、鴻の足之を續かは患ひなん、竹刀短かきも、其人に通すれば可なるものなり、相良氏は近頃珍まき、四人切の勇者なり、今は負けて退くも、其勇まき足音は、拍手喝采と相應じ、いと目覺しき武者振なり、或人云ふ相良氏の勝てるは、一の僻なりと、いと面白き評なり、

中村氏紅軍より出づ、初陣にて龍田嵐に吹かれたるは、今日が初金なり、大刀業稍珍まきもの、なきにしもあらねど、手際の小手一本を、得たるのみにて、辻氏より胴を再度、撃たれたるぞ、無念なる、屈する勿れ、失敗をもて、一の興奮劑たらまめよ、

代りて出でたるは、上田氏なり、流と云ひ業といひ、其振合宜敷を得、見所少なきにあらねど、何れも眞劍勝負とすれば、危険なる所、なきにえもあらず、上田氏胴二本を占め、辻氏は小手一本をとりて、打負けたり

松山氏白軍より、然と出て出づ、竹刀も共に短く、氣合も相敵し、暫く勝負もわかざりしが、小手一本の引分に、松山氏やがて面を取りたれば、勝は定りぬ、竹刀短かきも、一步進めば、長きに劣らじと、古今の金言、さもあらんかぞ、

松山氏と紅軍の若武者、川端氏との勝負は始まりぬ、一は長竹刀なれども、袋竹刀の風を漏れ、二は短かけれ共、袋竹刀にあらず、是一の奇觀にきて、流を異にせる互の僻に、何れも困れるやう見へたるが、袋竹刀の名残なる、小手二本のあまらひにて、勝は川端氏に歸す

白軍の厨氏來り向ふ、氏の太刀能く丈夫なるにはあらねど、いと鋭く、川端氏も辭する事なく、唯面一本を頂戴きて、打負けたり、これ川端氏の太刀跡、美に過ぐるの弱點より來れる結果にきて、若き百尺竿頭一步を進めば、後世恐る可きものあらん

紅軍の勇士佐々氏、躍然と出て向へり、軀軀小なるも、似合しからぬものあるは何ぞ、張飛をあざむく掛聲は、大きく高く鋭く強くして、地段太踏んで打ち込む切先、今日は生憎功を奏せず、

厨氏の鋭は益鋭、小手に續けたる面を得て、氏の勝とははやなりぬ、

片足躍りつゝ、紅軍より跳ひ出でたるは、戸策の東氏なり、大喝一聲眞甲上段に振りかざし、猿の狂ふが如く切り込んだる、面は物の見事に効を奏し、厨氏の鋭も忽ち鈍となり、傍人なきが如き、東氏の切先、又もや厨氏の頭上に落ち、三本を待たずして、勝負は決し、厨氏は退きたり、

白軍の諸岡氏、自家獨得の流義にて、空を翔りつつ面を撃ち、脇をくぐりつつ、胴を切る、東氏もこれぞ初對面の事とて、敵の勝手や知れざりけん、諸岡氏得意の胴のすりぬぎに、一度までかけられたることを、やさしけれ、輕さも矢張胴は胴、せん方なきを無念なる、

田中の傳氏、紅軍より顯はれ出でたり、今日ぞ武夫が原の初陣にて、功名手柄は此時と、祈りてめたる念力は、刀の柄と諸共に、小手は腕に握り占めたり、抜き合はたる太刀と太刀、輕重此に判然し、諸岡氏のは風の如く重く、田中氏のは千鈞の値あり、遂に面と胴との占領にて、田中氏の勝となり、諸岡氏肩をひそめて退く

白軍より意氣凜と出て出たるは、井手氏なり、實に天晴の武者振なりとは、公平なる或人の批評なり、平素修練の敏腕を振ふ可きは、此秋なるに、大小衝を失せる爲めか、又は田中氏の武運や強き、小手二本を取られて、井手氏の負となりぬ白軍の藤田氏出づ、兼て勝負強され方なれど、田中氏連戦連勝にて、勇氣他時に千倍えたる勢に如何でか大刀も向ふ可き、田中氏例の得意にて、小手を取るゝこと二回に及び、遂に勝を占めたりき、勝負は時の運と云ひつゝも、平素の修練第一ぞかし

上原氏は竹刀の先に、愛嬌を吊えつゝ、憎氣なき武者振を、足の下に蹈み占め、白軍方より徐々として出づ、田中氏は溢れ満ちたる、心臓の鼓動を竹胴にて敵ひながら、待ち構へたるが、はや抜き合せたる太刀の、高く飛んで面に響あるは、上原氏が敵の眉間を撃ちたるなり、田中氏は衰へたるにあらねど、面一つを報ひたるのみにて、不幸にも又小手を損なへば、勝は素より上原氏に歸す、上原氏の風情は更にも言はず、太刀跡一つの僻もなきはよき、されど美に過ぎなば、及

ばざる所なからんやは、上原氏と勝負に縁ある戸次氏、名譽を右の肩に擔ひつゝ、欣然とぞて紅軍より出づ、かねての手練空乏がらず、撓まず屈せず切り結ぶ、上原氏の太刀美に失するの極、面をとられ又戸次氏面を取りて、雌雄は二太刀にて決せり、余り無造作なる口惜まき、

新入の驍將、一騎當千の勳奮士、行徳氏は飄然とぞて顯はれたり、待ち構へたる戸次氏も、何れ劣らぬざるものなり、切り結びたる互角の太刀先、互の打のみ多くぞて、勝負もきはしわからざりまが、遂に戸次氏は衝一本を形見にて、行徳氏の胴と小手とに穿られたり、何れも術變化ありて、面白き勝負なりぞ

紅軍の敏腕家中島氏、竹刀輕げに携へつゝ、心高く体胖かに、敵の秘術を察えたるかのやうに、足場計りて立出たり、行徳氏もなに劣らざる氣位なり、各自の位置は假りの城、整はざるは一大事と、其間合或は遠く或は近く、機に應ずる様甚妙なり、流石行徳氏の手際は、一入著まぐ、或は掛け外すま、或は受け流ま、一轉一化奇また怪な

り中嶋氏面一本は得たれども、小手二本に制せられ、遂に負となりぬ。始終得意の技を用ゆれば、却て失敗するものなりと、或人は云ふ。

紅軍の士連戦連敗、はや余人なま、首將財部氏、憤慨措く能はず遺恨を、足の下に踏み占めつゝ、勇氣を刀の柄にひんすど固め、目指す仇は當の士と、打ち出す。及ば電光の、ひらめく姿にさも似たり、面の太刀は胴に落ち、小手の業は衝となり、品を盡し術を變へ、工夫をこらす有様は、責任ありての働きなり、敵の力に乗たる行徳氏は、柳の風に吹かるゝ如く、影の形に應ずる如く、受けつ返へまづ撫やまたり、勝の譽をにないたる、旭日昇天の勢には、財部ぬまも及びかね、隙をにらんで付け入たる、小手と衝との深手にて、無念を呑んで退きたり、弘法も筆の誤とはこれをこれ云ふか。

紅軍の天地、將倒れ兵盡き、今や蕭然として、霏雨將に至らんとす、されど天未だ紅軍を捨てず、弓矢八幡を後だてにきたる、儲も屈強の杉町氏は、鳩の羽音にや知りたりけん、危機一髪の際に、紅軍の殘兵とまて、天の遣はせるかのやう

に、忽とまてあらはれたるぞ、紅軍の幸なる、

行徳氏の疲れは、合戦と共に加はりぬ、杉町氏の剛氣は、味方の失敗にて、一層刺激されぬ、拍手喝采の攻太鼓と共に、戦は始まりたり、小蟲飛んで目に入らんとするとき、睫之を防ぐが如く、行徳氏のさも鋭き太刀を、杉町氏は一々受けとめたり、されど終りの小手一本は、見事行徳氏の占むる處となり、杉町氏の体當りは、行徳氏の尻餅となり、臼づきながら杉町氏の打込む刀を、受止めたるは、いとやさしき手際なり、されど猶豫は常にこそ、杉町氏は忽ち、太刀の先にて捻り倒し、胴の邊りを左のひげ足もて、またゝか踏みつけつゝ、心ゆくばかり咽喉をさせり、行徳氏の無念や、云ふも愚なからん、やがて引分れ、新たに後一本の勝負となりたるが、鬼どりひまどが如き、杉町氏の勢に、膽やつふしけん、行徳氏は胴の深手を負ひて、退きたり、されど武夫原の初陣に、敵を倒すこと四人に及びたるは、古來未曾有にはあらねど、近頃珍らまき手利なり、怠る勿れ行徳氏よ、

大浦氏白軍より出づ、面を一本得たるのみにて、

例の名残にや、胴の隙く所せん方なく、杉町氏物ともせず、面と胴とをまたゝかうちて、勝を占めたり、品變れば業代るとは、俗に言ふことなれども、注意すべきことになん、

野老山氏、嚴乎たる威様を整へ、小手の塵を拂ひつゝ、白軍より出向ふ、誇らば誇れ一うちゝ、云はん計りの風情にて、段平打ふり切て出づ、心豊かに構へたる杉町氏、稍短き太刀を眞甲斜めに上げたるは、唯受ける爲めにもあらず、やがて飛んで、敵の頭を掠めんとす、これこそ杉町氏の秘法にまて、敵の常に難んするものゝ如き、氏一と

足深くふみ込んで、丁と放ちたる太刀は、野老山氏の頂に落ち、山鳴り地動くが如き勢なり、利ある處必害あり、受太刀を利用する人は、胴の隙くを如何にせん、野老山氏其機を失ふ所やある、忽ち胴を參らせたる一撃は、實に千金の價ありといふべし、一上一下奮激突戰、遂に面を得て、勝は杉町氏に歸す、

白軍の士、甲亡び乙死す、優勢忽ら變じて無勢となり、兩軍の勝敗瞬間に迫る時、打ちもれたる一勇士は、勝木氏は出て向へり、平然として傍人な

きが如き、これ勝を制せらるゝ原因なるか、笏を戴けるが如き杉町氏の構變すると見るや、忽ち勝木氏の小手はうたれたり、如何なる機にや、杉町氏の竹刀落ち、面や危しと思ひけん、はや組かかれり、勝木氏刺きたる積りにや、胴と二聲三聲此時喝聲一時に起り、何事の起りしやを知る能はず、はや太刀を改めて向ふ、勝木氏面一つはとりたれども、打ち返へされたる杉町氏の面にて、已に雖雄は定まりぬ、名に云おへは負けずありなんものなるを、何を知らん、必しも名は實の實ならざるを、

これにて紅白勝負は既に終り、やがて外來劍客との打込稽古は堂々として起り、百雷一時に落つるが如く、武夫が原は、士氣蕩々とて、大海の潮の如き

昇級及び編入者左の如き

三級甲へ編入

井手龍之助

行徳 俊則

河端 八郎

田仲 忠良

田中 傳吾

四級甲へ編入

荒木 潮

大浦 熊雄

田尻 朝澄

村上 憲次

三級乙へ編入

牧 太直

松島 敬三

諸岡 三郎

中村 貞重

岩田 衛

高原榮太郎

濱崎 敬明

松山 重喜

五級甲へ編入

河口 敬信

今井 精一

有吉新太郎

二級甲へ昇級

上田 徹

友枝 照雄

財部 伸二

川村 茂民

宮下 清彦

二級乙へ昇級

岡上 梁

山村 文藏

勝木 奇熊

船田 一雄

江口 信行

杉町 晴一

四級甲へ昇級

五級乙へ編入

中島 種吉

手塚 光貴

田尻真太郎

野老山長角

妹尾 秀實

有光虎茂喜

三級甲へ昇級

辻 時之助

古賀 清太

佐々 徳次

小笠原長太郎

上垣 哲次

三級乙へ昇級

吉庄 新作

上村 真澄

辻 明

四級乙へ昇級

眞田 益尤

相良 武雄

淺井 虎雄

各部記事

演説部は例の如く盛大なり本月二日には狩野先生送別を兼ねて演説會を開けり此日朝來雨天にして道路泥濘なるにもかゝらはらず來會者の多き未嘗有なりき其詳報は次號に掲げん

擊劍部は十一月二十六日を以て紅白勝負を行へり其詳況は收めて本號雜報中にあり

柔道部も亦本月三日紅白勝負を行へり其龍攘

雜報

虎闘の狀に至りては乞ふ次號の出つるを待て

弓術部 東端松林の間弦聲常に絶えず三日に大會を行ふ例によりて盛

運動部 テニスはや盛なるが如し去る頃マツチありまときけと見ざれば其如何を知らず學課の忙はしきためか久しくベニスボールの練習あるを見ず凜平たる寒風の裡に勇みの肌をあらはしてハットを弄するも亦快ならずや

端艇部 久しく江津湖をのぞかねば今尙は三隻の白艇が日々鴉鳥を逐ひまわしてゐるや否やを知らず

擴張事業は往年第一着手として海軍より二艘の大端艇を貰ひしより一時中止の姿なりしが今回更に擴張の本体たる第二擴張を完成するため從來の法を改め左の諸氏に評議員を委託せり

教授 櫻井房記 杉山岩三郎 武藤虎太
田丸卓郎 篠本 二郎

生徒 鍋島 資高 清家源次郎 吉田入太郎
湯淺孫三郎 松崎 求巳 岸川 太郎
戸次 正 岩佐 正雄 和川 九市
平田 全祐 永村 清 石川 清人
富田 定壽 龜井 龍水 内藤 樂
小笠原長太郎

事業の進行甚だ有望なりなほ同會は造船所視察のため吉田久太郎氏を長崎に派遣したり吾人は一日も早く此擴張の完成せられんことを祈る

次に雜誌部は如何と云ふに相變らず不振勝なり前學年の末に於て吾人ひそかに期すらく當に新學年に入るの時に至らば吾人少しく計畫する處あり聊か紙面の一新を謀らんと然り而て今や果て如何ぞや投稿は益々少なく紙面は一層に振はず吾人は吾人が當初に於ける希望に對て忸怩たらざるを得ざるなり罪や實に生等にあり然れ共翻て思ふに同朋七百餘名其數に於て少なとせず其内豈錦心繡腸を具するの士に乏からんや我雜誌は會員一同の力に籍りて立つものなり諸君はたしかに本誌をえて盛大ならしむべき義務を有す其一部のなると二部的三部的なるとを問はず苟くも諸君の目に映ずるもの耳にきくものにして諸君の心に感ずるものあらば乞ふどりて之を本誌に投せよ吾人は信ず青年の時代は蘊蓄の時なり議論し問答し質疑て後秩序ある智識として蓄ふべきなり其秩序なく無暗に之を蓄へ深く藏めて出さざるは例へば猶暴飲

暴食の如き焉くんぞ之を消化し以て六尺の軀を養ふを得んや

今や文運日に月に其面目を改め幾多の名文名句を列べたる新書は日に幾十冊の多きを出す諸君已に此種の名文に飽く之を以てか自ら己を少とせ企て及ぶべからずとなすか我雜誌の目的は決て此等名文名句を羅列せんが爲にあらざるなり諸君希くは吾人の微衷を憫れみ其不敏を鞭ち以て我誌上をして光彩を放たしめよ吾人實に嚮望に堪えず

硯友會。秋深く、滿山の楓樹錦を曝し、籬邊の菊花芳を競ふ十一月の六日、硯友會は北坪井黒本先生寓に於て開かる。來り集するもの、皆是れ校内吟雅の士、錦心の溢るゝものは、即題に顯はれ、繡腸の迸るものは、探題と現す。先生の講話は、以て斯道の樂となるべく、興の湧出でえ連歌は、積日鬱屈の悶々を遣るに足るべし。午にえて之を開き、夕陽金峯を彩り終りて、晚鐘暮を報するの頃、各々袂を分ちぬ。是日會するもの十有二名。

(幹事報)

○近事片々

●俳句の會につき、近來我校にて俳句の研究絶えたりしが、此度校内の有志は漱石宗匠に乞ふて俳句の會を起し、斯道の研究をなすと云ふ、同好の士奮つて入會せらるゝあらば益する處多るべし、但し毎月一回運座を催ふす由にて、入會希望者は、紫川君のもとまで申込まるべしとなり、來校・長崎縣尋常中學玖島學館福岡縣尋常中學修猷館生徒及宮崎縣尋常中學校佐賀縣尋常中學校生徒は修學旅行とて先頃何れも我校を來觀せり
 全上 朝鮮亡命の客なる元朝鮮度支大臣警務使安綱壽氏の一行は二十八日我校を參觀きたり
 行軍 秋高く馬肥ゆるの候本校七百の健兒は山鹿菊池に向て二泊行軍を行へり錦なす楓樹の中に硝煙を上ぐる勇ましき實に是無風流の風流なるかな
 習學寮 自治制度は二十七に全廢せられ舍監制度となれり吾人は今之を是正するの權を有せず其進行之如何は以て双方の利害得失を知るべし只吾人は擾亂に次ぐに擾亂を以てせざらん事を

祈るのみ

訃音

昊天何ぞそれ情なき吾人豈凶事を記せんがために此筆を執らんや而も吾人をして號毎に凶事を記せざるべからざらしむ二部一年生豐永敏一君は去月十九日病みて熊本病院に没しぬ嗚呼悲しい哉先に本校修學旅行の舉あるや奮然起て其行に従はん事を期せりき十六日滿校七百の健兒部伍整々行を發せし時吾人は君が溫顔を隊列中に見ざるを疑ひぬ何を料らん事の此に至らんとは越えて二十日君が訃音に接す痛傷措く處を知らざりしもの久し嗚呼君が行軍のためになせし準備はやがて黃泉をたどらんための用意とはなりぬ悲哉玖麻川の流れば滾々として少時も絶えず而して君はた如何嗚呼此筆何等の凶筆ぞ記し終りて慨然筆をなげうつ

擴張費寄附者姓名

(申込ノ順序ニ依ル)

壹圓 山本 勇治 壹圓 勝屋 茂彦
 五圓 今村仁喜平 壹圓 鍋嶋 賢七

五圓	松原 勇吉	貳圓	橋口 兼滿	壹圓	鈴木 乘熙	壹圓	岸原 義路
壹圓	森 軍治	壹圓	堀内 氏敏	七圓	富田 長壽	壹圓	中野 悌治
壹圓	八波賢太郎	壹圓	藤波 久文	五圓	河野 通撲	貳圓	龜田猪之助
壹圓	上塚 眞熊	參圓	中村 祐興	貳圓	蓼原 好規	五圓	吉田幸兵衛
參圓	松岡己一郎	壹圓	濱地 尙人	壹圓	島田由五郎	貳圓	淺井 萬吉
壹圓	平井 惟次	壹圓	福地 春	貳圓	川本乾次郎	壹圓	吉田 美利
參圓	橋本 正吉	壹圓	關 清甫	壹圓	松田義太郎	四圓	江口 眞風
參圓	中村 彌平	壹圓	千手 都筑	壹圓	田崎 徳二	壹圓	甲斐 群藏
壹圓	内野 東庵	壹圓	西内 英	壹圓	十時 嵩	貳圓	拜崎 芳路
壹圓	村川邦太郎	參圓	末松 良子	參圓	三橋 勝到	壹圓	郡山 良介
貳圓	荒川 庄平	貳圓	緒方 夫門	貳圓	宮内 茂平	參圓	前田 良作
壹圓	大崎治三郎	壹圓	五拾錢坂卷悦造	參圓	馬場純治郎	參圓	有馬 純典
貳圓	生田秀三郎	貳圓	佐々木行義	參圓	西川 爲三	參圓	岡本 賴造
壹圓	船橋 正心	八圓	平田 大藏	貳圓	住田 金作	壹圓	飯塚 操
壹圓	龍 蟠藏	貳圓	川内 十平	壹圓	澤田 遊龜	壹圓	五拾錢田尻準二
壹圓	間崎 道寧	壹圓	三宅 惟中	壹圓	宮國 憑	參圓	石川 成誠
壹圓	五拾錢相良常雄	壹圓	後藤 長熊	參圓	鷹取 甚橘	五圓	安藤 眞一
壹圓	上妻 親政	參圓	村上 專精	壹圓	伊藤賢三郎	貳圓	大井 治義
壹圓	古賀 生三	壹圓	岡野健之丞	壹圓	萬澤 皞民	貳圓	菊池 淡水
參圓	生田 三省	五圓	吉川 繁太	壹圓	萩元 茂市	壹圓	野原 光彦
壹圓	池田 穰	壹圓	吉川甲多郎	壹圓	平山 龍太	壹圓	小野 俊夫

壹圓 小玉 彦市 壹圓

鬼 せい

壹圓 岡 新十郎

參圓 小河久四郎

壹圓 五拾錢 天野信敏

壹圓 諸富 杏坪

貳圓 菊池 春熙

壹圓 宗村敬四郎

壹圓 太田 卓二

五圓 秋月 胤永

參圓 田中 順信

壹圓 桑畑 英彦

壹圓 手島次郎治

參圓 寺田 利正

參圓 山崎 唐倫

壹圓 福原 清吉

貳圓 山崎 義質

壹圓 今井 尚人

貳圓 岡上 市次

參圓 倉知伊右衛門

貳圓 佐野 達

參圓 梅野 實

參圓 江浪富太郎

五拾錢 平田岩次郎

壹圓 桂 秀若

壹圓 磯 爲彦

貳圓 奧島鹿九郎

壹圓 中村 德則

壹圓 中山 忠作

壹圓 妹尾 赴

壹圓 岩岡勝三郎

壹圓 山村 捨次

參圓 大橋太平次

壹圓 五拾錢 荒木伴藏

壹圓 橫山 閑巢

壹圓 五拾錢 稻光 翁

五圓 川淵 正幹

壹圓 五拾錢 白河彌源太

參圓 阿部 賚夫

壹圓 九拾錢 白河彌源太

小以金四百九拾壹圓五拾錢

壹圓 小野 道衛

壹圓 石田守之助

以上第一回擴張

壹圓 松田唯四郎

參圓 井上 侃齊

以下第二回擴張

壹圓 持永 乙彦

壹圓 白濱 重治

壹圓 中井虎太郎

貳圓 宮地 善春

貳圓 弘世助三郎

壹圓 今中 耕作

五圓 佐々木正藏

壹圓 久保照八郎

壹圓 兒玉 直助

壹圓 西門 岩松

參圓 野口 鼎治

參圓 志波三九郎

五圓 杉村正太郎

壹圓 鹽谷 依信

壹圓 大庭 茂

壹圓 東 戸策

貳圓 薄井 丈吉

壹圓 奧平新吉郎

壹圓 御厨卯兵衛

貳圓 古賀昌次郎

貳圓 野村 元俊

壹圓 吉本 貞良

貳圓 佐藤 庫造

貳圓 坂田 三省

壹圓 奧 義太郎

壹圓 福田 九十

壹圓 内野次右衛門

壹圓 垂水 與八

壹圓 瀧野俊五郎

貳圓 眞鍋 奎輔

壹圓 美野源次郎

壹圓 宮崎 勝

壹圓 彼未 順平

壹圓 飯田 傳次

貳圓	中根 祚胤	壹圓	勝 平八郎	壹圓	鮎川 文太郎	參圓	田口 謙造
壹圓	岩田 春耕	壹圓	園田 茂一郎	壹圓	中村 朽	參圓	阿部 武三郎
壹圓	片山 善八	壹圓	紀井 周道	壹圓	岡村 逸作	貳圓	伊森 平七
壹圓	藤末 淺松	壹圓	草野 永敬	壹圓	稻川 寅彦	貳圓	半田 貢
貳圓	黒部 鉦太郎	壹圓	五拾錢山村 唯次	壹圓	田北 作太	貳圓	豐永 孚
壹圓	渡邊 長慎	壹圓	高宗 瑩純	壹圓	内田 逸藏	壹圓	日高 藤兵衛
壹圓	嶋田 郁二	參圓	山崎 政五郎	貳圓	馬場 直太郎	五圓	上村 延壽
壹圓	小野 昌訓	壹圓	野村 信夫	壹圓	生田 吉次郎	壹圓	江中 艇三
壹圓	阿形 謙吉	貳圓	大槻 英興	貳圓	大森 權作	壹圓	今里 村人
壹圓	古賀 常七	貳圓	近藤 常三郎	壹圓	鶴見 守義	壹圓	磯野 德太郎
壹圓	石神 德藏	壹圓	水口 政太郎	壹圓	田畑 吉作	壹圓	小泊 長八
壹圓	奥村 半部	壹圓	成瀬 多助	壹圓	太田 壽人	貳圓	桑野 萬藏
壹圓	青木 齟嬉藏	貳圓	柳川 眞清	壹圓	森 宅治	貳圓	吉富 實
壹圓	前田 伊右衛門	壹圓	多田 吉甄	壹圓	諫山 回春	壹圓	高橋 彌三吉
壹圓	川瀬 久平	壹圓	松野 周吉	壹圓	五拾錢藤堂 愿哉	壹圓	東 肅造
壹圓	濱武 龜代	壹圓	五拾錢眞田 慶善	參圓	眞鍋 猪平太	壹圓	高築 要作
壹圓	宮崎 林	壹圓	田仲 義一郎	壹圓	星島 熊吉	貳圓	福島 文濤
壹圓	大谷 幸市	壹圓	香月 信助	貳圓	山之内 嘉也	壹圓	志賀 肇
壹圓	五拾錢池内 清間	貳圓	駕海 幾太郎	貳圓	築山 俊碩	壹圓	荒木 周平
壹圓	五拾錢古賀 常七	壹圓	香西 清次郎	貳圓	友枝 照雄	貳圓	行德 源誠
參圓	關 俊治	貳圓	井原 英市	五拾圓	長崎 次郎	拾圓	長崎 庄八

拾五圓	長崎	茂平	貳圓	岩野	直英
參圓	南部	常次郎	壹圓五拾錢	伊東	糸藏
貳圓	嶋	重治	貳圓	枝光	寅太郎
壹圓	新美	吉清	五圓	白河	次郎
貳圓	西川	文市	壹圓	今井	猪太郎
壹圓	松崎	基礎	壹圓	月本	猪介
壹圓	甲斐	一之	參圓	下山	秀久
參圓	摺谷	五郎	五圓	平松	末吉
五圓	湯原	元一	五圓	牧	彦七
貳圓	片山	貞松	貳圓	廣田	直三郎
壹圓	安藤	俊明	壹圓	谷	祐雄

小以金參百參拾八圓五拾錢

(以下次號)

青柳の糸のみだれを春風の

ゆたかなるよに忘れずもがな

白川樂翁公

